

- * 「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」（ヨハネ1：1）飛騨古川教会が所有していた（今は東京基督教大学に保管）ヘボン＝ブラウン訳聖書は木版刷りの貴重なもので、一教会員が友人であったお寺の住職から譲り受けた物であった。それはヨハネの福音書であったが、その出だしは「原始（はじめ）に言霊（ことだま）あり。言霊は神とともに在り。言霊は神なり。」「ことば」という言葉は「言霊」と訳されている。また、日本語訳で最も古い「ギュツラフ聖書」の冒頭は「はじまりにかしこいものござる」と「ことば」は「かしこいもの」となっている。どちらも、「ことば」に人格を持たせて味わい深い訳となっている。
- * 「ことば」のギリシャ語原語は「ロゴス」著者ヨハネは、1：14で明らかになるように、「ロゴス」ということばでイエス・キリストをあらわした。当時のユダヤ人は、天地は神のことばによって創造されたと信じていたし、ギリシャ人は宇宙を支配する原理は「ロゴス」であると考えていた。彼らは「ロゴス」は万物の出発点であることで一致していたからである。
- * キリストとはどういうお方なのか。「初めにことばがあった。」「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記1：1）と同じ「初めに」である。すなわち、イエス・キリストは宇宙万物が造られる前から存在していたということを表わす。「ことばは神とともにあった。」「ことば」すなわちキリストは神とともにあった、とは、神と同等の地位にあって同等の力があるということ。聖書では「神の右に座しておられる」とも表現している。そしてずばり、「キリストは神であった。」「あった」とは過去のことでなく、過去から現在までずっと変わることなく、これから先も神であるという意味である。「神である」とは永遠、偏在、全知、全能、聖、義、愛など、神のすべての性質を完全に持つておられるということである。
- * ヨハネはいつも主イエスの身近にいた弟子であった。「キリストは神ではなかった。神のような人にすぎなかった」とか、「神のように見えただけ」だとか、「神ではなく、神が最初に造った人である」とかの間違った考えを正すため、自分が見聞きしたことを証として書き記したのである。
- * 「この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」（ヨハネ1：1～3）イエス・キリストは創造のわざをされた造り主である。聖書はこの世を造った創造主と造られた被造物との間にはっきりと線を引いている。聖書の神は「人間を造った神」。しかし日本の神（々）は「人間が造った神」。人間の欲望や願望を何でも神として崇めてしまう。これを聖書は「偶像礼拝」として厳しく禁止している。
- * クリスマスとはイエス・キリストの誕生をお祝いすること。アドヴェントとは、誕生を待ち望む期間。神の愛の最高のプレゼントであるイエス・キリストを一人残らず受け取りたいものである。

